シルバーファッションショー出演者の被服に関する意識

京都大学大学院　教育学研究科

片　本　恵　利、木　村　大　生、西　尾　　新

The purpose of this study is to investigate the effects of clothing on self-awareness of aged person. The subjects are models and audiences of two fashion shows for aged. We investigated their attitudes to clothing for aged with observation, questionnaire, interview, and "the Clothing Completion Test" that we have developed in this study. "The Clothing completion Test" is a kind of drawing test and aimed for measuring interest in clothing numerically.

Some cases we met at the fashion shows imply that aged participants have changed their self-images by clothing. Thus, we may suggest that the important factor for aged person's clothing is not only design such as colors or materials, but also opportunities where aged people can experience change of their self-images by changing clothing. In addition, it is very important point that they can share the opportunities with others such as their families or their caretakers.

In conclusion, we would like to say that what is important for all of us is to produce wide choice of clothing for aged people and assist them in creating new self-images with clothing.

The results of the questionnaires on self-awareness and the Clothing completion Test show correlation between public self-awareness and the form quality of the Clothing Completion Test. This correlation may show the validity of the test.

はじめに

近年、急激な高齢化社会に対応するため、高齢者の生きがいや生活の質（QOL）に関する研究や取り組みが増えてきたことは周知のとおりである。しかし、個人の生活を「衣・食・住」に分けて考えた時、とりわけ「衣」への取り組みは不充分であると言えよう。わが国における高齢者の被服についての研究はほとんど蓄積がなく、それぞれの現場で暗中模索が続いているのが現状である。そこで、高齢者の被服について研究するには、先入観を排して事実を観察し、収集したデータを丁寧に検討し、考察を得ることから始めるべきである。しかし、高齢者が被服に関する意識を言語によって直接表現することには多くの困難を伴う。高齢者の多くは、これまで装うことを「贅沢」として抑圧する環境の中で過ごしてきた。また、痴呆や言語障害から言葉によるコミュニケーション自体がスムーズに行かない場合も多い。実際、筆者らがこれまでインタビューなどで被服に関して高齢者の意見を求めても、「年を取ったら服装などどうでもいい」・「年寄りになったら皆が勧めてくれる服を着ていればよい。あれこれいうのはみっともない」・「そんな話は若い人に聞いてほしい」・「年寄りをからかったらいかん」・「今のままで十分ありがたい。これ以上言ってはぜいたくだ」・「男は服装など構うものではない」・「目立たないのが一番。自分がどういうのを着たいなどということはない」などの、被服に無関心、あるいは関心を持つべきでないという反応がほとんどであった。これらの高齢者は嘘を言っているわけではないが、高齢者への社会的圧力やインタビューという特殊な状況が、彼らに遠慮や過剰適応を促し、被服への無関心を強調させている可能性がある。このように考えると、彼らの言語による報告は、必ずしも彼らの心の真実を反映しているとは言えない。そこで、筆者らは、塗り絵の手法を応用した「被服構成法」と、シルバーファッションショーという二つのアプローチを用いて、高齢者の着装行動に関する探索的研究を試みた。本研究では、このうちのシルバーファッションショーを取り上げる。

Participants' awareness about clothing in a fashion show for aged

Eri Katamoto, Taisei Kimura, Arata Nishio*

Graduate School of Education Kyoto University

目　的

本研究では、シルバーファッションショーを一つの実験状況と捉え、高齢者の着装行動の観察結果をもとに分析を加えることによって、シルバーファッションショー出演者の自己意識の変化について考察を得ることを目的とする。

方　法

高齢者の被服に関する取り組みの一つとして、各地でシルバーファッションショーが催されるようになった。機能を重視したもの、リフォームを生かしたものなどさまざまなものがあるが、筆者らのファッションショーの特徴は、「衣裳やモデルに制限を設けないで、高齢者自身の装いたいという気持ちを重視する」ことである。「制限を設けない」ことで普段の生活に「非日常」を持ちこむ本研究のショーは、「日常着」を「元気な高齢者」をモデルとして見せることが多かったこれまでのショーに比べて、普段は見られない高齢者の被服への関心、着装行動の特徴が表れやすくなることが期待される。具体的には、以下の事柄を柱とする。

1）モデルの選択に制限を設けない

誰でも、年をとり、身体が弱っても、自分の着たい被服を身に着けたいと願うであろうし、被服は生涯身につけ続けるものである。本人の希望があれば、危険のない範囲で生活自立度（ADL）にかかわりなくモデルになれるようにスタッフが努力する。

2）衣裳に制限を設けない

特別な日の装いなら、着脱は互いに助け合えばよい、転倒防止にはエスコートがつけばよいという考えに基づいている。着脱のしやすさや転倒防止など機能・安全面を考えるとボタンやファスナーのデザイン、丈やフレアーに制約が加えられやすいし、「高齢者らしい」となると地味で無難な色・形になりがちである。しかし、本研究におけるファッションショーでは、本人が着たいと思うデザイン、着た人を美しく輝かせるデザインを重視する。

調　査

1．ファッションショー1

日　時：1997.11.23.

場　所：京都市内の特別養護老人ホーム

モデル：上述の特養入所者15名。（うち男性3名、女性12名。自力歩行6名、歩行器使用3名、車椅子6名。痴呆のある方を含む。）

モデルへの調査：

ⅰ）事前調査。調査内容は、被服構成法およびインタビュー、写真・ビデオ撮影である。

ⅱ）当日調査。継時的な写真（更衣前、化粧後、更衣後、本番、本番終了後）撮影、ショー本番のビデオ撮影を行った。

ⅲ）直後調査。調査内容は、事前調査と同じである。

ⅳ）事後調査。調査内容は、事前調査と同じである。当日には、スタッフへの調査；シルバーファッションショー終了後、付き添い・カメラ・ビデオスタッフに、質問紙調査を行った。

施設スタッフへの調査：付き添いスタッフらと同じ質問紙調査を、後日回収という方式で行った。

2．ファッションショー2

日　時：1999.3.13.

場　所：ハートピア京都

モデル：24名。（うち老人クラブ会員　男性2名、女性10名、計12名。全てADL自立。特別養護老人ホーム入所者　男性3名、女性9名、計12名。自力歩行3名、歩行器使用5名、車椅子4名、痴呆のある方を含む。）

老人クラブ会員モデルへの調査：継時的写真撮影（更衣前、更衣・化粧後、本番後）、本番のビデオ撮影、ショー終了直後の集団法による被服構成法を行った。

特養入所者モデへの調査：継時的写真（更衣前、更衣後、本番後）撮影、本番のビデオ撮影と、後日、面接法による被服構成法およびインタビューを行った。

観客への調査：ショーのプログラムに、モデル・ファッションショーへの感想を質問項目とした記述式質問紙を添付し、ショー終了時に回収した。

スタッフへの調査：ショー終了直後、モデルの表情・行動の変化に関する質問紙調査を行った。

結　果

1．モデル（注1）

ⅰ）赤い衣裳が着たかったが落ち着いた色の衣裳しかなかったところ、気がすすまない様子であったが、スタッフが衣裳のエレガントさ、似合っていることを強調すると、次第に受け入れ、本番では堂々とパフォーマンスを披露する（女・75）。

ⅱ）本人の選んだ明るい色の衣裳に家族が反対し、地味なものを選びなおす（女・75）。

ⅲ）当初、モデル出演には慎重な態度を取っていたが本番では喜んで「冥土の土産にします」と言っていた。ところが後日写真を見て、思い描いていたイメージとの差にがっかりし、不満をスタッフに直接向ける替わりに「若い人（＝80代以下）に比べて自分は美しくない」と自己卑下する（女・93）。

2．観　客

ⅰ）有効回答51。うち男性6名、女性45名。

ⅱ）年代別内訳;10代3名、20代4名、30代1名、40代6名、50代4名、60代10名、70代20名、80代3名。

ⅲ）回答例

・モデルが生き生きしている、楽しそう、美しい、笑顔が印象的（多数）／若い人には似合わない服を高齢者が着こなせる（女・76，26）。

・デザインをもう少し機能的に（転倒の危険、着脱の便）（女・67，46，16）／普段でも着れる服、楽に着れる服が見たかった（女・39，13）。

・高齢者には勇気がいる、派手（女・80、24）。

・明るい色がよい、赤い色がよい（女・82，76，69、62，44）。

全体的には肯定的な意見・感想や新鮮な発見への驚きを述べたものが多かった一方で、安全性や便利さを気にするもの、普段着られる服がよい、などの機能重視を求める意見、派手過ぎるといった拒否的な意見も見られた。

考　察

筆者らは当初、「ファッションショーによって高齢者の自己イメージが変わり、自己評価が向上する」という仮説を考えていた。しかし、実際に起こったことはより複雑で

あった。本研究から見えてきたことの一つに、高齢者の被服と公的自己意識と私的自己意識との関係がある。興味深いのは、観客調査で、高齢者の観客の方が、明るい色がよいという回答が派手で嫌というものより多数だったこと、逆に50代以下の観客に「高齢者には勇気がいる」という形で派手さに懸念を示したり、はっきり「派手過ぎる」と拒否反応を示す回答が見られたことである。事例からも分かるように、選択肢が示されれば明るい色の服を着たいと思い、着てみると似合うと感じる高齢者も多いし、加齢に伴い心身の機能が衰えた者にも、ハレの日の特別な一着があってもよいはずである。ところが、周囲の者が、高齢者の被服は機能を重視し無難なデザインにするべきである、との先入観から抜けられないために、装う本人の意思が必ずしも反映されず、機能的・安全・無難などの理由で周囲に承認されやすい被服を選んでしまう可能性が示唆される。

被服は、社会的コミュニケーションの道具の一つであり、装い、周囲に見せることによって一つの「記号」となり「意味」を持つ。しかも、事例でみたように、最初は気に入らなかった衣裳を受け入れ、周囲に承認されることによって自己イメージが膨らんだり、逆に本人の望む衣裳に周囲が承認を与えなかったために自己イメージの変容の機会が失われたりする。このように、ひとつの衣裳が与える「意味」は一義的に決まっているのではなく、常に変容しうるのである。被服による自己イメージの変化は、決して装う本人の内側だけで起こるのではない。被服による高齢者の自己イメージの変容とは、高齢者が「私らしい」と感じられ、周囲も承認できる被服が増えることであると言うことも出来る。したがって、被服が高齢者の心理に及ぼす影響について考える時には、「この色を身につければ元気になる」というような、特定の効果を狙って被服のデザインそのものを検討することよりも、装う本人も周囲の者も心から「素敵」・「似合っている」と思える被服を身につける「場」をつくることこそが重要である。筆者らの関わったファッションショーも、装う人を輝かせる衣裳をつくり、強制はせずに心をこめて衣装を勧め、本人が納得のいく衣裳を選び、周囲が自然に承認を与えるプロセスが不可欠であった。「いい衣裳を作ったから嬉しいだろう、これを着れば元気になるだろう」という一方的な考えでは、本研究で観察されたような自己イメージの変化は起こらなかったであろう。

勿論、これらのことから直ちに被服のデザインや機能の開発・研究が無駄だということにはならない。高齢者の被服は極端に選択肢が少ないのが現状である。事例にもあるように、明治から戦前生まれまでの実に幅広い年齢層をひとくくりに「高齢者」と呼ぶことにも限界がある。高齢者が「私らしい」と感じられる被服をさらに増やすためにも、我々の側の先入観を排して地道に研究を重ね、選択肢を増やすことこそ、高齢者が生き生きと暮らせる真の高齢化社会の実現に向けて我々が出来ることなのではないだろうか。

注１：スタッフへの質問紙調査の結 による。（　　）内は性・年齢。

［資　料］　被服構成法の作成

目　的

本文で述べたようにインタビュー調査によって、高齢者が被服に対して持つイメージを知ることは難しい。その原因としてインタビューを受けた高齢者がインタビューに慣れていないことに加えて、「被服」のイメージを言語化することが困難であり、また被服に対するイメージを表現することへのてらいがあったと考えられる。そこで筆者らは被服のイメージを比較的容易に表現できる非言語的手段として、クレヨンを用いた塗り絵形式の描画法を採用し、被服構成法と命名した。この被服構成法において塗り絵形式の描画法を採用した理由は以下の４点である。第１に非言語的表現にすることで、イメージの表現という困難な課題を容易にしたこと。第２に下絵があることにより、描画への抵抗感を低減させられること。第３にクレヨンを用いることで，細かい描画を要求しないこと(注2)。第４に標準化が可能となること。

本被服構成法では、描かれたアイテム(注3)や使用された色、描き方に注目することにより、高齢者が被服に対して抱いている興味・関心を数 化する技法の開発を目指した。

被服構成法

１．実施方法

図　版：冊子形式の下絵（図１）。

用　具：サクラクレパス25色セット太巻き、鉛筆。

手続き：調査にあたり、各被験者に冊子とクレパスを配布し、集団により実施する。教示は以下のように行なう。「自分が着てみたいと思う服を自由に描いて下さい」描画は被験者ペースで行なう（以下、下絵の上からクレヨンによって描かれた絵をサンプルと呼ぶ）。

２．採点方法

得られたサンプルについて、（１）アイテムの数、（２）使用された色数、（３）形態水準の３つの基準から採点し、サンプルに関する数 的分析を行なう。

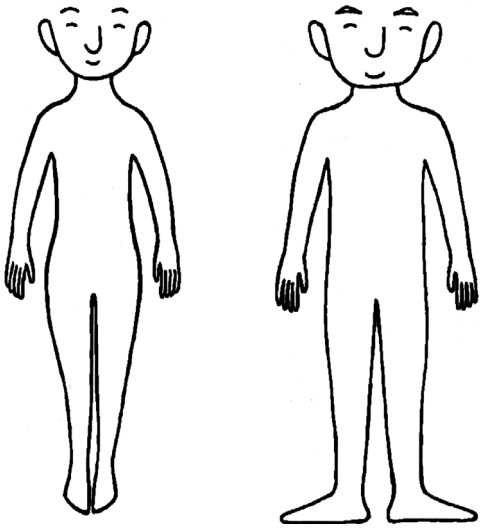

図１　被服構成法図版

表１　衣服アイテムとアクセサリー／化粧アイテムのカテゴリー

	カテゴリー	カテゴリーのアイテム
衣服アイテム	ジャケット類	ジャケット，カーディガン，ジャンパー，パーカー
	シャツ類	シャツ，ブラウス，カットソー，Ｔシャツ
	スカート類	スカート
	ズボン類	ズボン，スパッツ，スラックス
	ワンピース類	ワンピース，ドレス
	セーター類	セーター
	ベスト類	ベスト
	コート類	コート
	靴下類	靴下，足袋，ストッキング
	着物類	着物（帯を含む）
	その他	上記以外
アクセサリー／化粧アイテム	頭髪	頭髪
	靴類	靴，草履，下駄
	帽子類	帽子，ヘアアクセサリー
	イヤリング	イヤリング
	ネックレス類	ネックレス
	ブローチ類	ブローチ
	ネクタイ類	ネクタイ，アスコットタイ
	眼鏡類	眼鏡，サングラス
	指輪類	指輪
	時計類	時計
	口紅類	口紅
	頬紅類	頬紅
	アイメイク類	アイメイク
	マニキュア類	マニキュア

（1）アイテムに関する数 化

衣服（計 11 項目）とアクセサリー／化粧（計 14 項目）の下 カテゴリーに項目を分類する（表１）。

１）衣服アイテムはジャケット類・シャツ類・スカート類・ズボン類・ワンピース類・セーター類・ベスト類・コート類・靴下類・着物類が描かれていれば、各１点と点数化し、その合計を衣服アイテム得点とする。なお上記カテゴリーでは分類できないアイテムはその他として扱い、各１点として点数化する。

２）アクセサリー／化粧アイテムに関して，髪・靴類・帽子類・イヤリング・ネックレス・ブローチ・ネクタイ・メガネ類・指輪・時計・口紅・頬紅・アイメイク・マニキュアのいずれかのアイテムが描かれていれば各１点として点数化し、その合計をアクセサリー／化粧アイテム得点とする。

（2）使用された色に関する数 化

筆記用具の 25 色を予備調査[注4]によって明色群(計８色：だいだい・きみどり・黄色・あか・むらさき・レモン色・みどり・みかん色）と中間色群（計９色：ぐんじょう・朱色・明るいむらさき・ももいろ・みずいろ・あお・あいいろ・おうど色・しろ）と暗色群（計８色：はだいろ・ふかみどり・ちゃいろ・はいみどり・くちばいろ・はいいろ・くろ・こげちゃ）の３カテゴリーに分ける。数 化に際しては、サンプルに使用された色を数え、各カテゴリーの合計点を算出する。

（3）形態水準に関する数 化

輪郭の有無、表 の様子、言語的説明の有無、塗りの丁寧度の４指標により点数化を行い、４指標の点数を合計したものを形態水準合計得点とする。

１）輪郭の有無

輪郭の有無はさらに (1-1) 外側の輪郭、(1-2) 内側の輪郭、(1-3) 髪型の輪郭の３下 カテゴリーに分けられる。外側の輪郭とは下書きの線にとらわれないアイテムの輪郭のことである。一方内側の輪郭とは１つのアイテムの内部を線で分節化しているものであり、アイテム間の境界ではない。ここではポケット・襟・ボタン・袖の折り返しなどを指す。また後述の柄とも区 される。

(1-1) 外側の輪郭　外側の輪郭がないものを「０点」、下書き内部にアイテムの輪郭を作っているものを「１点」、さらに下書き内部の輪郭に加えて下書きを越えてアイテムの輪郭を作っているものを「２点」とする。

(1-2) 内側の輪郭　内側の輪郭がないものを「０点」、アイテム内部を分節しているものを「１点」、アイテム内部の分節が複数箇所見られるものを「２点」とする。

(1-3) 頭髪の輪郭　頭髪がないものを「０点」、頭の形に対して整合性のない頭髪を「１点」、普 の頭髪を「２点」とする。

２）表 の様子

表 の様子は下 カテゴリーとして (2-1) 柄、(2-2) 混色、(2-3) 頭髪の混色の３カテゴリーに分ける。

(2-1) 柄　柄がないものを「０点」、１アイテムが色分

けされているか、あるいは塗り方による織・編み柄の表現がされているものを「１点」とする。

(2-2) 混色　混色が見られないものを「０点」、複数色の重ね塗りが見られたものを「１点」とする。

(2-3) 頭髪の混色　頭髪の色がないものを「０点」、単一色の場合を「１点」、複数色の場合を「２点」とする。

3）言語的説明の有無

描画に現れていない情報への言及

言及がないものを「０点」、言及があるものを「１点」とする。

4）塗りの丁寧度

全く塗られていないものを「０点」、輪郭からのはみだしや斜線による表現でアイテムの内側に白い部分が残るものを「１点」、アイテムの内側がほぼ塗りつぶされているもの（意図的に空白を用いた表現もこれに含める）を「２点」とする。

まとめ

本テストの構成概念妥当性を検証する手段として、被服構成法の各尺度と自己意識尺度との相関の検討が考えられる。筆者らは1999年３月のシルバーファッションショーの際に、ショーの出演者を対象にして被服構成法と菅原（1984）の自己意識尺度を同時に実施した。被服構成法の各尺度と自己意識尺度との相関（ケンドールの順 相関係数）を求めたところ、形態水準合計得点と公的自己意識尺度得点との間に、正の相関（$r = 0.561$, $p < .05$, $n = 7$）が見出されたのに対し、私的自己意識尺度得点との間には相関は見出されなかった。この結 は，形態水準が自己意識の中でも「見られる自己」あるいは「場に規定される自己」を表わす公的自己意識と関係していることから、被服構成法の妥当性を部分的に示している。しかしサンプル数が少ないので、今後のさらなる検討が必要である。

注２：描画法の１つにバウムテストがある．高齢者に対する実施は非常に困難であった．

注３：描かれた衣服や化粧・アクセサリーのパーツを指す．

注４：大学生・大学院生を被験者（n=15）として用具のクレヨン25色各々につき，形容詞対「地味－派手」を５件法によって評定させた．

（引用文献）

菅原健介　1984　自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み，心理学研究，55，184-188．

（注：代表研究者が吉川左紀子助教授から西尾新氏に代わって報告されたものです。）